

CASE 4

生徒と教員による
座談会をレポート

不測の事態から生徒を遠ざけない。
エラー＆ランで育つ「挑戦できる力」

FC今治高校 里山校（愛媛・私立）

不満で教員は動かないと知り
気づくと不満は「企画書」に

2024年4月に新設された、FC今治高校 里山校（以下、FC今治高校）。ロールモデル不在の時代に、主体性をもつて困難に立ち向かい、次の時代を切り拓く人材を輩出することを目指して、実践重視のカリキュラムを設計している。学びの姿勢としてモットーにしているのが、失敗を恐れずに学びへとつながる「エラー＆ラン」だ。やってみないとひらめいたことは、まずやってみる。失敗でも成功でも、その結果を素直に受け止めて、自分なりの意味や、次につながる気づきを得ることを大切にしている。

どのような環境が、そのエラー＆ランの循環を促すのか。1期生である現2年生の生徒たちと、教員の方々（FC今治高校では先生ではなく「コーチ」と呼ぶ）に語り合っていたいた。

聞くと、開校からの1年間はエラーの連続だったという。それだけ、生徒もコーチも、うまくいくかわからないことに挑戦してきたのだろう。1年の間に、部活やコミュニティの立ち上げ、ボランテ

ィアや地域活動など「これをやりたい」という声や、徐々に、生徒一人ひとりからあがるようになった（▶Keyword ①）。

しかし、それらの活動をコーチが逐一管理・指導しているわけではないので、蓋を開けてみると想像以上にうまくいったケースもあれば、大失敗するケースも

もちろん、開校当初すべての生徒に、やりたいたことがあったわけではない。校長の辻 正太さんによると、何をしていいのか戸惑う生徒や、不平不満をもらす生徒もいたとか。「校長室を開放しているので、生徒たちが入ってきて、学校や寮についてあれこれ文句を言ってきたこともありました。でも私は『そうなんだ』と返し、それ以上のことはしなかった」と辻さん。不平不満を言うだけでは何も変わらない、「こうしなさい」とコーチから指示することもない、と暗に伝わったのだろうか。次に校長室を訪れた生徒たちは、なんと、みずから企画書を書いてきたそう。やりたいたことがあるが、どうしても自力ではできない、と言われれば、コーチはできる限り協力する。実際に、生徒の藤本健汰さんが「オンラインコミュニティ」を立ち上げたので8000円出資して

※学園長 岡田武史さんのメッセージもあわせてお読みください（3ページ）。



校長
辻 正太さん

2年生
井出 光波さん

2年担任・数学担当コーチ
宮谷 拓也さん

2年生
藤本 健汰さん

2年生
菊地 春海さん

Keyword ① /

「やりたい」は生徒から

試行錯誤の1年間で生徒にも変化が。
自発的に、さまざまなコミュニティで活動し出す。



学校を飛び出して地域で実践する「探究ゼミ」や自分の興味関心をベースにしたマイプロジェクトのほか、企業活動や地域活動、ボランティアなど、生徒の主体性に任せてさまざまな形、時間で、やりたいことができる。入学当初は「やりたいことがわからない」とモヤモヤしていた生徒も、周りの同級生の活動に触発されてか、徐々に自分から「やりたい」と声をあげるように。写真(上)はFC今治高校里山校の有志が能登で復興支援のボランティア活動を行った様子。井出光波さんも参加した。

Keyword ② /

日本一出会いの多い学校

多種多様な実業家・実務家による
特別講義を開催。



トヨタ自動車会長 豊田章男氏、EXILE HIRO氏、TETSUYA氏、プロテニスプレイヤーの伊達公子氏など、業界の最先端で活躍する講師が講義を行う特別講座も。注目されるために著名人を呼ぶのではなく「成功者のように見える人にも失敗体験があることを生徒に感じてほしい」という思いがあるとか。出会いによって生徒が“覚醒”していく様も見られる。



「学園長の岡田武史さんからは常々『子どもたちは育つ力をもっているのだから、大人はそれを邪魔するな』と言われてます。当初は、生徒たちの状況をもっと把握し、支援したほうがいいのでは、という議論もありましたが、不要な助け舟を出す頻度は徐々に減っていきました(辻さん)

エラーで気づく、行動を阻む箱。その箱から出るまで

生徒たちに自発的な行動が増えていったのは夏休み明けごろからだそう。「同級生から刺激をもらったり、長期休

みに体験したことが意欲になったりして、行動が加速していったのでは」と2年担任の宮谷拓也さんが語る。

その言葉に、生徒の菊地春海さんがうなずく。入学当初は、やりたいと思っただことをすぐに行動に移せずにいた菊地さん。もともと関心のあった投資をテーマに投資部を立ち上げたものの、思うように進まなかった。そんなエラーを経て「周りの人に好かれたいという気持ち」が、行動のブレーキになっていたことに気づいた」と語る。あるとき、同級生の前で、金子みずぎさんの「みんな違って、みんないい」のフレーズを借り「みんな違ってどうでもいい」と、自分の思いをプレゼンした。みんな違うのだから、みんなに好かれる必要はない。思いを打ち明けたら、同級生は面白がって受け

入れてくれたのだそうだ。「自分の素をさらけ出しても大丈夫という安心感が生まれて、どんどん挑戦していこうと思えた。同時に、みんなのことがもっと好きになりました」と菊地さんは言う。

何が、その生徒のブレイクスルーにつながるかはわからない。だから「コーチにできるのは、そのきっかけになるかもしれない出会いや、視座を変える機会を提供すること」だと辻さん。「日本一出会いの多い学校」にしたいと掲げる(▶Keyword ②)のも、そうした理由からだ。出会いを経て、自分一人では起きないような心の揺れが起こり、次の行動につながるっていく。

エラーが言葉育てる

生徒たちの話からは、あえて「振り返

教員の役割は 待つ、寄り添う、受け入れる

教員のことを「先生」とは呼ばない。
同じ目標に向かって伴走しながら、
いっしょに驚き、考える「コーチ」。



コーチと生徒の関係はフラット。コーチの姿勢として、教壇に立って教えるのではなく、生徒の隣に立ち、いっしょに考え、寄り添うことを大切にしている。

【寄り添うための問いかけ】

- 「どうしたの？」
- 「どうしたいの？」
- 「私に何ができる？」

見える」と成長を実感する。

エラー&ラインを繰り返すことで、行動の精度も上がっていく。菊地さんは「1年生の間はとにかく打席に立って、飛んできた球をすべて打つぞ、と意気込んでいたような感覚だった。2年生の今は『選球眼』を高めたい」と話した。

コーチも「実践者であれ」

「生徒たちの成長を邪魔しない」と心がけているコーチたちだが、決して、生徒をほったらかしているわけではない。気になる様子の生徒がいれば「どうしたの？」と声をかけるし、希望があれば、生徒がコーチを選んでマンツーマンで話せるお茶会の場を用意している。

辻さんいわく、コーチは先に手を出さず、生徒たちから言葉が出たり、生徒自身が決めたりするのを、忍耐強く信じて待つこと。その思いに寄り添い、受け入れることを大切にしているそう(▶Keyword ③)。「だから、見守りはするけれど『こうすれば?』とは言いません。壁にぶち当たって、どうにもならない様子でいる生徒を見つけたら、まずは『どうしたの?』と聞く。答えが返ってきたら『君はどうしたいの?』、また返ってきたら『僕に何か手伝えることある?』。この3つの質問を繰り返すうちに、生徒たちは、自然と変わっていく(辻さん)

教えるのではなく、同じ目標に向かって伴走する役。だからコーチ自身も実践者であることが求められるのだと、

宮谷さんは語る。

「この1年間、辻さんには『生徒に学校から飛び出せと言っているのだから、コーチが学校の中に留まっていって、どうするんだ』と何度も言われてきました。だから私も、副業で記者をしたり、ラジオ番組のパーソナリティーをしたりと、時にエラーもしながら、行動の範囲を広げてきた。同じ実践者としてのスタンスをもつことで、指導しなければと焦らず、生徒たちを見守ることができ





るようになってきたように思います」

(宮谷さん)

**起きることはすべてが必然。
その意味を考える**

生徒の主体性や育つ力を信じて、見守る。授業を休んで活動を行う場合などは報告してもらおうが、基本的には学び方や活動の仕方は任せる。

そのことを徹底するためにも「命の危機に関わること」と「法律に触れること」「人の成長を邪魔すること」の3つは、「やってはいけない大原則」として全

員で認識しあつて活動している(▼**Keyword 4**)。校則と言えるようなものはそれだけだ。それ以外は何をやってもいい。グレーなところは、その都度、生徒たち主体でルールを決めている。

辻さんは試行錯誤の1年間を振り返り「大人には『失敗』に見えるような体験でも、生徒が何らかの学びを得ているのなら、それは『失敗』ではない。生徒自身の捉え方と、『その後』が重要だと気づいた」と語る。学園長の岡田さんが常々「起きることはすべてが必然。それが起きたことの意味を考えるのが大事」と伝えているそうで、その言葉がコーチにも生徒にも浸透しているのだ。

さらに辻さんは「自分にコントロールできることなど、たかが知れている、とも思うようになった」と言う。「それまでは『生徒の主体性を大切にすると』と言いつつも、大人がコントロールする枠の中で、生徒たちを踊らせていたことに気づきました。思い切つて枠を外してみたら、生徒たちは想像を超えたアクションを起こしてきた。好き勝手やっているうちに、周りに協力してもらわなければならないと気づいた生徒もいる。生徒のオーナーシップを奪つてはいけないと、つくづく感じた」と辻さん。今は、想定外・板挟み・修羅場という3つの言葉を大切に、不測の事態から生徒をできるだけ遠ざけないようにしている。

本当の意味で生徒たちに任せる。不測の事態が起きることを受け入れる。育てる側に、相当の忍耐と覚悟が必要

であるようにも見えるが、辻さんは「やる前から『これはやっちゃダメ』と生徒の行動を止めなくてもよくなった、というの、実はすごく楽なんですよ」と笑う。

エラーは「特別じゃない」

入学直後「オンラインコミュニティを立ち上げたいので8000円出資してほしい」と辻さんに直談判した藤本さんは、1年間さまざまな挑戦を続けながらコミュニティを拡大してきたが、運営に課題を感じ、1年生のおわりに、コミュニティを解散することを決めた。「それが入学してから、最大のエラーでした」と藤本さんは言う。そのときは落ち込んだのかもしれないが、座談会では後ろ向きには見えなかった。

失敗が挫折にならない。なぜなら生徒もコーチも、誰もが当然のようにエラーし、すなわち失敗をしているからだ。

「あえて言葉にしなくても、みんながそれぞれのタイミングで、壁にぶち当たったり、自分の生き方に疑問をもつて立ち止まったりしているのは、なんとなくわかる。波があるんですよ。それが当たり前だから、僕のエラーは別に『特別なことじゃない』と思う」(藤本さん)

エラーは必ず起きるもの。エラーすることから始まる。その考えが隅々まで根つき、挑戦できる力を育成している。「失敗しないのは『挑戦していない』ということじゃないかと思う。だから失敗すること、かつこ悪いとは思わない。むしろ、失敗の数だけかつこ良くなれるのかな」と藤本さんは語った。

\\ **Keyword 4** /

やってはいけない大原則

野外体験活動にも力を入れているが、生徒の主体性や育つ力を信じるために、やってはいけない大原則を徹底する。



授業に出ない自由はあるけれど、人の授業を邪魔する自由はない。やってはいけないことを明確にすることで、生徒たちを信じ、任せられるようになった。

【やってはいけない大原則】

- 「命の危機に関わること」
- 「法律に触れること」
- 「人の成長を邪魔すること」